

第14問 動産質に関する次のアからオまでの記述のうち、判例の趣旨に照らし正しいものの組合せは、後記1から5までのうち、どれか。

ア 質権者は、質物から生ずる果実を取返し、他の債権者に先立って、被担保債権の弁済に充当することができる。

イ 質権の設定は、債権者にその目的物を現実に引き渡さなければ、その効力を生じない。

ウ 質権者は、その権利の存続期間内において、質権設定者の承諾がなくても、質物を第三者に引き渡して、当該第三者のために転質権を設定することができる。

エ 質権者は、質権者による質物の使用について質権設定者の承諾がなく、かつ、目的物の保存のために質物の使用の必要がない場合であっても、質物の使用をすることができる。

オ 質権設定者が被担保債権の弁済前に質権者に対して訴訟を提起して目的物の返還を請求し、質権者が質権の抗弁を主張した場合には、裁判所は、当該請求を棄却すると判決をするのではなく、被担保債権の弁済と引換えに目的物を引き渡せとの引換給付判決をしなければならない。

1 アイ      2 アウ      3 イオ      4 ウエ      5 エオ

## ズバリ解説

肢ウは動産質における転質権の設定、肢エは動産質における質物の使用が論点となっています。

いずれの論点も、質権設定者の承諾の有無が、ポイントとなっていますので、知識を混同しないよう、テキスト等で整理して学習することが大切です。

民法：27

第13問

質権

質権に関する次のアからオまでの記述のうち、正しいものの組合せは、後記1から5までのうち、どれか。

ア 同一の不動産について複数の不動産質権が設定されたときは、その不動産質権の順位は、設定の前後による。

イ 「立木ニ関スル法律」に基づいて登記された立木は、不動産質権の目的とすることができる。

ウ 動産質権者は、所有者である設定者の承諾を得なくても、質物の保存に必要な範囲内で、当該質物を使用することができる。

エ 土地及びその上に存する建物が同一の所有者に属する場合において、その土地又は建物につき不動産質権が設定され、その実行により所有者を異にするに至ったときは、その建物について、地上権が設定されたものとみなされる。

オ Aが自己のBに対する債権を担保するため、B所有の甲動産について質権の設定を受けた後、Bの承諾を得ずに甲動産について転質をした場合において、不可抗力により甲動産が滅失したときは、Aは、転質をしたことによって生じた損失について、その責任を負わない。

1 アイ      2 アオ      3 イウ      4 ウエ      5 エオ